様式１（小・中）

令和６年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	唐津市立名護屋小学校

1　前年度 評価結果の概要	・「●業務改善・教職員の働き方改革の推進」以外は、「B:おおむね達成できている」の評価であった。さらなる児童への意識付けと指導の徹底が必要である。また、具体的取組については成果に結び付くよう検討を要する。 ・「ふるさとを愛し、夢に向かって自ら輝く児童の育成」を目指して、教育課程に地域学習を位置付け、地域のヒト・モノ・コトを活用した特色ある学校づくりを目指したが、教員の意識がやや不足している。
2　学校教育目標	育てよう！未来を広げる「賢さ」「優しさ」「逞しさ」 ― ふるさと名護屋をステージに ―
3　本年度の重点目標	**■賢　さ～しっかりと考え、自ら進んで学ぼうとする子どもを育てる。** **■優しさ～思いやりの心をもち、仲良く協力し合う子どもを育てる。** **■逞しさ～チャレンジ精神をもち、最後まであきらめない子どもを育てる。**

4　重点取組内容・成果指標　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○学習に対する心構え及び学習規律の定着	○授業前の学習用具の準備率を90%以上にする。 ○授業中、自分の考えや意見を発表することができる児童の達成率を80%以上にする。 ○授業中、友達や先生の話をしっかりと聞くことができる児童の達成率を90%以上にする。	・毎学期、学習規律に関する「学びの構え」アンケートと、学習に必要な生活習慣に関する「よい子のくらし」アンケートをとり、取り組みに対する進捗状況を確かめる。 ・取り組みに対する進捗状況や結果を、学校だよりや学級通信、懇談会などで紹介したり、啓発したりして、目標達成に向けた更なる意欲の向上を図る。	B	・3学期の「学びの構え」アンケートでは、学習用具の準備達成率は77%、発表の達成率は68%、話を聞くの達成率は81%と、数値目標よりも達成率を下回る結果となった。今回の結果を課題として捉え、次年度は、より「学びの構え」の内容を常に意識した児童への声掛けや教師の働き掛けを強化していく必要性を感じた。 ・年間3回の「よい子のくらし」の取組により、学習に必要な生活習慣を家庭と連携して意識付けることができた。各学期で結果に上下はあるものの、どの観点も高い達成率であった。	B	・教師側に指導の工夫が見られる。児童は他者と協力して、よく考えている。 ・「よい子のくらし」は、家庭でも役立っている。	・学力向上対策コーディネーター
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○児童生徒が年間1回は月目標を達成し、○○名人となるようにする。 ○公の場で相手を尊重する呼称（さん）を付けることのできる児童を80%以上にする。 ○みんなに、自分から挨拶できる児童を80%以上にする。	・月目標の達成者を○○名人として放送することで、めあて達成への意識づけを行う。また、年間を通して○○名人を掲示することで達成への意欲を高める。 ・～さんと呼ぶことができているかを、月目標の振り返りで確認し、評価する。 ・挨拶に対する達成度を確かめる機会を設けたり、挨拶運動週間を設定したりする。	B	・挨拶名人の取組は、達成度を評価できる機会となり、挨拶への動機付けにつながった。月目標での挨拶に関する振り返りにおいては、100%の児童が目標を達成することができていた。 ・月目標については、児童全員が年間1回は○○名人になるという目標を達成することができた。 ・生活目標や挨拶名人への取組を設定することで、児童の相手を思いやる気持ちや達成感を育てることができた。	B	・○○名人の取組はすばらしい。子どもの意欲を高め、他者との人間関係を深めることにつながっている。 ・自分から挨拶できる児童を90%以上にしてほしい。	・人権･同和教育担当者
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○Q-Uテストで「学級生活満足群」の割合を70%以上にする。 ○いじめ未解決案件を0件にする。	・学校生活アンケートを学期に一回実施し、状況把握と児童の困り感の解決に努める。 ・学校生活において、児童の困り感を職員連絡会等で共通理解する。 ・Q-Uテストの結果を基に、SCやSSW等と協力しながら良好な対人関係を築く。	B	・日頃から児童の実態把握に努め、困り感をもつ児童について職員連絡会で報告・連絡・相談し、全職員で共通理解を図ることができた。 ・SCやSSW等と協力・連携し、良好な人間関係の構築を促すことができた。	B	・子どもの生き生きとした姿や子どもとの会話から、先生を信頼していることがよく分かる。	・生活部
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●児童へのアンケートにおいて、「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童の割合を90%以上にする。 ●◎児童へのアンケートにおいて、「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童生徒を85%以上にする。	・校内研究の充実を図り、楽しく分かる授業を展開するように努める。また、各教育活動において、児童への称賛的な声掛けや支援を意識した指導を行う。 ・努力して達成可能な年間の目標や各学期のめあてなどを立てさせると共に、それに向かって自ら率先して行動に移せるように環境を整え支援を行う。	B	・より楽しく分かる授業を展開するため、全学年の授業研究会を実施して校内研究の充実を図った。授業中のみならず各教育活動において、児童への称賛的な声掛けや支援を意識した指導を行った。結果は、数値目標の90%を下回る83%の達成率であったが、職員の児童への称賛と支援の意識は100%という結果であった。 ・年間を通して、学期の目標や各活動のめあて等、児童の意欲や思いを教室に掲示するようにした。結果は70%と数値目標である85%を下回りはしたものの、児童の努力と取組に対するある一定の成果は見られたと思われる。	B	・多様な体験を積ませて、将来への夢を見つける活動を工夫してほしい。	・教務主任
	○毎日の登下校指導	○毎日の登校の集合時間を守っていたり、地域の方へ挨拶をしたりしている児童を80%以上にする。	・5～6年生の地区長を月末に集め、登下校の評価をさせたり、問題を話し合ったりする。	B	・登下校時に列が乱れたり集合に遅刻したりするなど地区毎に課題があったが、担当者による細やかな指導により改善傾向が見られる。 ・地域の人や友達に元気な挨拶をする児童が増えた。	B	・登下校は、家庭でも一番心配である。 ・指導のおかげで、時間に遅れる子、集団の列が乱れていることが減ってきた。	・生活部
●健康・体つくり	●運動習慣の改善や定着化 ●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童生徒80%以上 ●「健康に良い食事をしている」児童生徒100%	・職員や委員会からの広報により外遊びを奨励したり、外遊びをよくしている学年を称賛したりする。また、もりもり健康委員会と連携し、全校遊びに取り組む。 ・スポーツチャレンジの記録を毎回更新しようとする意欲を継続するために、記録を掲示したり学級だよりで広報したりする。 ・学級指導や保健だよりで食事の大切さを伝えていく。 ・健康観察記録表に月毎に食の大切さを意識できる標語を載せる。	B	・気候のよいときだけでなく寒い季節も、男女問わず多くの児童が20分休みや昼休みに外遊びをすることができた。しかし、学校外での運動の時間が短く、結果は72%であった。 ・スポーツチャレンジをそれぞれの学年で取組むことができた。また、1月には縦割りグループ毎に8の字跳びの取組を行い、児童は記録を伸ばそうと意欲的に活動することができた。 ・もりもり健康委員会の放送では、赤・緑・黄色の食べ物の紹介をした。それにより、どの食べ物が体のどんなことによいのかを児童が少しずつ理解してきた。健康によい食事をしていると思う児童の割合が、94%であった。	B	・社会体育に参加して体を鍛えている。何もしていない子との格差が大きくなっている。 ・スポーツチャレンジに期待している。 ・学校全体が元気になってほしい。	・保体部
	○早寝をして、望ましい生活習慣を身に付ける	○毎日の健康観察で、決められた時間に寝ている児童を80%以上にする。	・毎日の健康観察時に、早寝ができていない子の理由をたずね、改善していく。 ・学期ごとの「よいこのくらしアンケート」で、保護者からもチェックしてもらう。	B	・3･4･6年生は決められた時刻に寝ている児童の割合が改善し、80%以上にすることができた。しかし、低学年では9時過ぎまで起きているという実態がある。 ・低学年・中学年・高学年毎の寝る時刻を保護者へ知らせることが必要である。	B	・スマホの利用時間が守れず、早寝が守られていない。	・保体部
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・業務を見直し改善を図る。会議の精選、学校行事、業務分担、校務分掌について検討する。 ・地域との連携強化を図る。地域人材に担ってもらう体制を整える。	A	・全職員の時間外勤務の月平均は約26時間（前年度比約10%減）、「業務効率化・時間外勤務時間の削減」への意識は高い（職員アンケート100%）。 ・時間短縮だけでなく業務内容を見直すとともに、地域人材を活用してより質の高い教育活動になるよう努めた。	B	・時間短縮と業務内容の充実のバランスは、難しいのではないか。	・管理職
●特別支援教育の充実	○特別支援教育に関する意識の向上を目指す	○特別支援教育に関する意識が向上したと回答した教員80%以上	・研修、講座等の内容を職員研修会で情報共有・共通理解する。 ・職員連絡会等で定期的に気にとめおく児童の情報交換をする。	B	・職員研修会での情報共有や共通理解、SC・SSWの校内巡回等を通して、特別支援教育に関する意識が向上したと回答した教員は100%であった。 ・全職員の共通理解を図り、児童の支援に努めてきた。来年度の特別支援学級への新規入級者が2名予定されている。	B	・特別支援教育に対する理解は、だんだん広まっている。	・特別支援教育コーディネーター

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言	
○地域に開かれた学校づくりの推進	○総合的な学習の時間「ふるさと名護屋」の実践 ○学校の教育方針並びに教育活動の広報	○「名護屋の自慢に気付いた」児童60%以上 ○学校における教育活動の様子を家庭や地域に向けて積極的に発信する。	・名護屋城跡をはじめ、ふるさとのヒト・モノ・コトについて地域の人と学び、関心をもたせる。 ・学校だよりの発行や学校HPの更新等に努める。	A	・「名護屋の自慢に気付いた」児童は91%で、目標を大幅に上回った。また、「学校は、家庭・地域と連携しながら教育活動を充実させていると思う」と回答した保護者は100%であった。 ・学校だよりやテレビのニュース等による教育活動の発信・広報に努めた。	A	・「名護屋の自慢」を保護者・地域も共有したい。 ・地域密着は、小学校のときが大事だと思う。 ・学校周辺への校外学習の機会を増やしてほしい。	・管理職

●･･･県共通　○･･･学校独自　◎･･･志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・本校では、重点目標「賢さ」「優しさ」「逞しさ」を各部・各学級で具現化しながら、「ふるさとに誇りをもち、夢に向かってチャレンジする児童の育成」に努めてきた。その結果、自分のよさを知り、友達と協力しながら夢に向かって頑張ろうとする子どもの姿をよく見かけるようになった。また、保護者・地域の協力によって「ふるさと名護屋」の理解が着実に高まり、上級生になると、ふるさとに愛と誇りをもつ子が多数を占めるまでになった。「ふるさと名護屋をステージに」の具体的な姿をもう一度確認したい。 ・小規模校・単学級の本校では、生徒指導上問題となる子は極少数である。心身共に安定した環境で育っているが、「主体的に学ぶ」「切磋琢磨」「競争」の意識が弱い。それを補うのが学校力・教師力・授業力である。教師の資質能力の向上が急がれる。